

アビスに潜む魔獣たちに生贄に捧げられる生徒たちの運命は!?

アビスの女神たち

フォイア-エムブレム風〇雪月 異種姦ノベルCG集

DEEPRISING

アビスの女神たち

CAUTION!

未成年の方の購入・閲覧を禁止します！
画像の無断転載・加工を禁止します！

Reprint is prohibited !

Prologue

エーデルガルト「本当に怪しい人影がここに？」

ベルナデッタ「はいっ…！間違いないです！！」

ガルク＝マク修道院の裏手…

士官学校にも近い場所に集まっているのは

黒鷲の学級長 エーデルガルト

ベルナデッタ ドロテア…

そして金鹿の学級

ヒルダ、リシテア、マリアンヌたちの姿もあった

そして彼女たちの中心にいるのは「ベレス」

士官学校の教師であり生徒たちから「師」と呼ばれ

異常なほどに慕われている元傭兵の美人教師であった

ベレス「こんな穴…前は無かったよね？」

ベレスたちの前には怪しい人影が逃げ込んだと思われる

巨大な穴が地下深くへと向かい開いていた…

ヒルダ「なかったと思いうけど…。」

リシテア「無かったに決まっていますよ、

あればとっくに騒ぎになっているはずですから。」

ドロテア「あ、それもそうね。」

マリアンヌ「ということは…最近開けられたものなのでしょうか…？」

ベレス「誰が…何のために…？」

明らかに人為的に掘られた痕跡の残る穴

セイロス教団の関係者が掘ったものであるならば

士官学校教師のベレスに何の連絡も入っていないのはおかしい

だが、教会や士官学校に何の関係のない者たちが誰にも気づかれずに

行ったとは考えにくかった

エーデルガルト「たしか以前に聞いたことがあるわ
ガルグ＝マクの地下には無数の地下通路が張り巡らされている…と。」

ベレス「その通路を利用して賊が侵入しようとしたと？」

エーデルガルト「可能性はあるわ…。」

ベレス「うん、そうだね…少し調査してみる必要があるかな。」

ベレスとエーデルガルトは
ヒルダ、ドロテアの二人を連れ地下への探索へと向かうことにした

万が一賊と遭遇した場合を考え、完全武装を整え
リシテア、マリアンヌ、ベルナデッタの3人を教会との連絡役として
残したのだった

エーデルガルト「やはり地下には無数の通路が広がっていたのね…。」

ベレス達は地下に足を踏み入れ 地下通路へと到達した

複雑に入り組んだ通路が無数に広がり
一度迷えば簡単には抜け出すことはできないだろう

ドロテア「誰かが通ったのは間違いないわね…それに…。」

ヒルダ「明らかに誰かここに住んでるわよね。」

地下通路に残された痕跡は一つでは無かった
大小様々な大きさの靴跡が残され…通路の奥には松明の明かりが
灯っていた

ベレス「賊…というわけでもないのかもしれない。」

残された小さな足跡を見てベレスはそう呟いた

エーデルガルト「…とはいえあんな大穴を開いて
見過ごすことはできないわ、
しっかりと話を聞かせてもらわないとね。」

ベレス「そうだね…奥へ進もう。」

???「そこまでですわよ！」

ベレス「!？」

地下通路を進んで数分…突然目の前に謎の女が現れた

金色の髪に整った顔立ち…

そして士官学校の制服と酷似した服を纏った美女

コンスタンツェ「あなたたちの正体も目的もわかっていますわよ！」

その女は高飛車な態度でベレスたちを睨みつける

コンスタンツェ「アビス住民の排除のために

教会が送り込んだのですわね！

このコンスタンツェ=フォン=ヌーヴェルの目は誤魔化せませんわ！」

コンスタンツェと自ら名乗った女性は

ベレス達に対して敵対心を剥き出しにしていた

ベレス「う～ん、困ったなあ…。」

状況がよく飲み込めていないベレスたちは対応に困っていた

互いに誤解しあっているのは間違いないだろう

だが、相手の事情が掴めない状況では説得のしようがなかった

コンスタンツェの背後には仲間と思われる複数の影が潜み

弓でこちらを狙い定めていた

エーデルガルト「戦うしか…ないわね。」

ヒルダ「アビスの住民…噂で聞いたことがあるような…。」

ドロテア「どんな噂なの…？」

ヒルダ「教会に追われた犯罪者たちが暮らす町があって…
セイロス教団への復讐を企んでいるって…
そして夜になると地上に出てきて女子供を攫っていくと…。」

コンスタンツェ「な…なんなのよその噂…デタラメですわ！！」

ヒルダ「そしてアビスの奥に潜む魔物に生贄にささげてるって…。」

ドロテア「そ、そんな噂があったの…？」

エーデルガルト「つまり…敵ってわけね…？」

コンスタンツェを睨みつけるエーデルガルト

コンスタンツェ「ち…違うわ！間違っていないけど…違うの！
たしかにそういう犯罪行為に走る者もいるけど…わたくし達は違う！」

必死に言い訳するコンスタンツェ
彼女が言う「犯罪行為に走る者たち」と同じ扱いにされることが
よほど嫌でたまらないらしい

ベレス「…うん、敵では無いのかな…。」

コンスタンツェが敵ではないと思い始めていたベレス
しかしそこに…

ハピ「コンスタンツェ…やつらが攻めてきたっ…。」

コンスタンツェ「なんですって…こんな時に…
あなたたちはアビスへ…住民たちを守りなさい！！」

背後に潜んでいた仲間たちに合図を送るコンスタンツェ

ベレス「何か事情があるみたいだね。」

エーデルガルト「そうみたいね…師…どうするの？」

ベレス「……………」

焦るコンスタンツェの姿を見つめるベレス…
その困り果てた様子を見て…放っておくことなどできなかった

ベレス「つまり…アビスには2つの勢力が存在するというわけ？」

コンスタンツェ「そういうことですわ、さすが士官学校の教師！
話が早くて助かりますわ！」

コンスタンツェの話によれば…
現在アビスは2つの勢力に二分し争っているという…

コンスタンツェ達…灰狼の学級の生徒たちが守るのは
地上に住むことを許されない人々がひっそりと平穏に暮らす町

そしてもう1つが
罪を犯し教会に追われた者たちが地下に逃れ作り上げた町…
恐怖と力により支配され、いずれ教会の復讐を果たすことを生きがいと
犯罪者たちの勢力

犯罪者たちは日々の食糧や
性欲を満たす為に女をアビスの町や地上から連れ去り
その責任をアビスの町へと押し付けてきた

地上のセイロス教団は2つ存在する勢力を
1つの町だと思い込んでおり
今まで受けられていた地上からの支援は打ち切られ
アビス成敗のために部隊を組織しているという噂が流れ始めていた

ヒルダ「それで私たちが討伐部隊だと思い込んだわけね？」

コンスタンツェ「そうよ…悪かったわ…。」

ハピ「あんな完全武装で来たら誤解して当然…。」

コンスタンツェの隣にいるのは彼女と同じ灰狼の学級の生徒…「ハピ」
無気力でやる気の無さそうな態度をとるが
アビスの町を心配する想いはコンスタンツェと同じようだった

エーデルガルト「仕方ないわ…こうなったら協力するしかないわね。」

ベレス「アビスの町のほうは大丈夫なの？」

ハピ「あっちはバルト達がいるから平気…。」

ベレス「そ…そう、なら私たちは町を襲う敵に奇襲をかけるわよ。」

バルトという人物が何者かはわからなかったが
ハピは説明しようとしな

ベレス達が駆け付けた時、すでに町は敵に襲われていた

敵の数は想像以上に多く、
町を守る男たちも苦戦を強いられているようだ
だがそんな中で…大柄な筋肉質な男が敵を投げ飛ばし次々と敵を倒す
獅子奮迅の戦いぶりを見せていた
おそらくあの男がハピの言っていた「バルト」なのだろう

彼がいれば町の正面は守り切れる…だが
犯罪者の勢力は次々と町を襲うために暗闇から現れる…

ヒルダ「一体どれだけいるのよっ!？」

次々と現れる敵に動揺を隠せないベレス達…
コンスタンツェ達もこれほどの数の敵が
襲撃してくるとは予想外だったようだ

コンスタンツェ「一体どうしたら…いいの。」

エーデルガルト「ここは思い切った行動に出る必要があるわね。」

ベレス「…ええ、こっちから仕掛けるしかない…
ドロテアは地上に戻って応援を頼むね。」

ドロテア「…わかったわ先生…無理しないでね。」

ハピによれば敵はアビスの町よりさらに
地下深い場所に拠点を築いているという…
迫る敵を切り倒しながら、
ベレス達は敵が上ってくる潜入地点を探した

数多くの敵が襲い掛かってきたが…士官学校で鍛え上げられた
ベレス、エーデルガルトの敵ではなかった

コンスタンツェとハピも非常に高い実力を持っており
二人の足手まといになることはなかった

ベレス「どうやらここから上がってきてるようだね。」

コンスタンツェ「こんな場所から…予想外でしたわ。」

複雑に入り組んだ無数の地下通路…
ここで暮らしているコンスタンツェ達も
そのすべてを把握してはいない

エーデルガルト「ここを崩せば大分時間が稼げるはず…。」

ハピ「早くしたほうがいいと思う…。」

コンスタンツェ「そうですわねっ…！」

ベレス「わかった…任せて…！」

腰から天帝の剣を抜き…構えるベレス…

輝くその武器を見て

目を見開き驚きを隠せないコンスタンツェとハピ

だが…その時…

地下深くから地響きと共に聞こえてきた雄叫び…

グラグラと地下全体が大きく揺れ動いているようだった

エーデルガルト「な…何が地下に潜んでいるの…！？」

コンスタンツェ「ち…地下には魔獣が潜んでいるって噂はあるけど…。」

ハピ「まさか本当だった…なんて…。」

ベレス「ヒルダがそんなこと言ってたね…。」

動揺を隠せないコンスタンツェ達…

ベレスはひとまず敵の進行を防ぐために通路を崩そうと剣を構えたが

ベレス「…えっ…うぐっ！？」

突然背後に感じた何者かの気配…同時に背中から受けた大きな衝撃…

エーデルガルト「師っ！？」

その衝撃で大きく吹き飛ばされ地下へと落ちていくベレス…
ベレスの瞳には…自分を襲った何者かが
仲間たちを次々襲い掛かる姿が見えていた

ベレス「うっ…ここはっ!？」

落下したショックで意識を失っていたベレス…
ぼやけていた視界がハッキリしてくると…
自分を見つめる何人もの男たちの姿が目に入った

男「ようこそ…アビス最奥の町へ…。」

ベレス「…っ…!？」

体を起こそうとしたベレスだが…両腕の自由が利かない…
彼女の腕には枷がハマられ拘束されていた

ベレス「…私と一緒にいた仲間たちは…？」

男「ああ、すぐそばにいるぜ…おい連れてこい!!」

エーデルガルト「離しなさいっ!？」

コンスタンツェ「わ…わたくしを誰だと思ってっ!？」

ハピ「あとでひどい目に合わせてやるから…。」

ベレスと共に何者かに襲われた3人だったが怪我をした様子もない

ベレス「みんな…大丈夫っ!？」

エーデルガルト「師! よかった…怪我はないっ!？」

ベレスに気づくと嬉しそうな笑みを浮かべるエーデルガルト

コンスタンツェとハピもベレスを見て
少し安心したらしく表情が和らぐ

男「さて…全員揃ったことだし…さっそくはじめようか！」

ベレス「えっ!？」

エーデルガルト「なによっ!？ きゃあっ!？」

コンスタンツェ「さ、触らないでっ!？」

ハピ「い、いやあああっ!？」

男たちは抑えていた性欲を解放し一気に4人へと襲い掛かった

服を剥がれ乳房を丸出しにした4人…

そして男たちは乳房へと指を食い込ませ激しく愛撫しはじめる

エーデルガルト「うっ…あああっ!？」

ベレス「や…やめろっ…!？」

男「さて、こっちも…挿ませてもらおうかっ！」

スカートを捲られ秘部…そして尻を撫でまわされる

コンスタンツェ「や…やめ…そんなところっ!？」

ハピ「だめ…そんなところ触らないでっ…！」

男「ふひひ、こんな極上の女なんて初めてだぜ…！」

男「まったくだ…生贄にささげるなんてもったいねえな…！」

ベレス「…な…生贄っ…？」

男の言葉に反応したのはベレスだけだった

エーデルガルトたちは男たちに全身を愛撫され
会話を聞く余裕などない

男「さあ、それまではたっぷり楽しませてもらうぜ！」

コンスタンツェ「い、いやああああっ！？」

ハピ「だ、…だめえっ！？」

下着を下ろされ秘部を丸出しにされたコンスタンツェとハピ

男たちにじっくりと秘部を観察され指で弄ばれ…
体を悶えて喘いでいる

そして…

コンスタンツェ「ああああっ！？それは…やめてっ！

ハピ「ダメ…挿れないでっ！」

泣き叫ぶ二人…だが…

女が少ないこのアビス最奥の町に暮らす男たちには
そんな悲鳴も御褒美でしかない

コンスタンツェ「あああああああ！！！！？」

ハピ「うううああああああっ！？」



いやあつ、そんな汚いものを…
わたくしの中に…あああつ!!
やめなさいっ…そんな激しく…!!

男たちの肉棒が二人の秘部の中へと挿入されていく
苦痛に顔を歪め歯を食いしぼる二人…だが

肉棒は根元まで膣内へと収まり…激しく子宮を刺激した

コンスタンツェ「あつ…あああああつ…!？」



ハピ「あああ…ああっ!？」

大粒の涙を流し続ける二人…
男は容赦なく激しく腰を振り二人の体を揺さぶり始めた

エーデルガルト「や…やめなさいっ！こんなことして…
教会がだまって…！」

男「教会が黙ってないってか…良いだろう相手になってやるさ！」

男「俺たちはセイロス教団のおかげでひどい目にあってきたんだよ…
そんな脅しは聞かないぜ…？」

エーデルガルト「や…やめて…そんな汚いものっ…うっ!？」

男の肉棒を強引に口内へと押し込まれたエーデルガルト

頭を抱えられ強引に揺さぶられる姿は帝国皇女とは思えない姿だった

ベレス「くっ…エーデルガルト…。」

必死に頭を働かせてこの状況を打開しようとするベレス

だが…

ベレス「ひあああああ!？」

男に股間に顔をうずめられ秘部を激しく舐めまわされ…
頭が正常に働かない

さらに乳首を舐めまわされ全身を愛撫され体を震わせるベレス…

ベレス「あっ…ああああダメエエし!??」

男たちの前で大量に潮を噴き上げてしまったベレス…

男たちはそんなベレスの姿を見て激しく興奮していた

同時にエーデルガルトの口内に射精された男の精液…

エーデルガルト「がはっ…あああ…飲みこんで…しまった……！？」

男の苦い精液の味と喉を通るドロドロとした感覚がまだ残っている…

愕然とした表情で茫然とする二人…

そんな二人の体を男たちは抱え…押し倒す…

エーデルガルト「あああああっ！！??」



ベレス「うあああああああっ!??」

男に尻を突き出し、背後から肉棒を挿入されたエーデルガルト

そして押し倒され激しく肉棒で突かれているベレス

涙を流し必死な形相で叫ぶ二人…

激しい苦痛に襲われたただ泣き叫ぶことしかできない



エーデルガルト「あああああああっ!？」

ベレス「あああああああっ!??」

その横では…

コンスタンツェ、ハピの二人も激しく男に犯され続け…
もはや限界に達しようとしていた

コンスタンツェ「あああ、ダメですわっ…もう…でちゃうっ!!!？」

大量の潮を噴き上げスカートをごっしよりと濡らすコンスタンツェ

全身を激しく痙攣させ視線が定まっていない

男に強引に肉棒を口内に押し込まれ、

舌と上から激しく責められているハピ…

口内に入り込んだ肉棒のせいで悲鳴を上げることもできず
体を大きく反らせ…全身を震わせ大量の潮を噴き上げた

コンスタンツェ「もうだめ…おかしくなっちゃいます…わっ…。」

ハピ「も…もうだめ…もう飲めないっ…。」

精液を何度も口内射精され飲まされたハピ…
口元から溢れた精液が零れ落ちている

男「よおし…そろそろお前たちの中に出してやろう！」

男「こんな大勢の男に出されるんだ…一体誰の子を孕むんだろうな？」

コンスタンツェ「い、いやああ…。」

ハピ「…そんなのだめ…。」

エーデルガルト「やめて…私はアドラステア帝国の…っ…！」

ベレス「……………うっ…あああ…。」

もはや抵抗する気力も残されていない女たち
男たちは最後の仕上げと…激しく腰を振り4人の体を揺さぶった

その激しさに喘ぎ叫び続けるベレス達…

豊満な乳房を大きく揺らし男たちに見せつける…
もはや恥じらう感情など彼女たちには残されていない

コンスタンツェ「あはあああああああっ!？」

ハピ「中に…出てるううっ!??」



男のうめき声と共にあふれる大量の精液…
二人はビクビクと体を震わせそのまま安心してしまった



エーデルガルト「ああああ、師っ…私もうダメえっ!!」

ベレス「私も…もう…何も考えられないっ!!」

エーデルガルトとベレスは男に犯されながら…
何度も潮を噴き上げ続けた

教師と生徒…

互いにこんな恥ずかしい姿を見られるという屈辱感…
それが性欲を刺激し激しい興奮へと変わっていた

エーデルガルト「あああああっ！？出てる…中に出てっあああああっ！？」

ベレス「あはあっああ…！！？ 妊娠しちゃうっ…のっ…？」





一晩の間に何人もの男たちに抱かれ続け
全身精液塗れになり倒れこんだまま動かない4人…

そんな4人の周囲で何かを相談する男たち…

男「本当に生贄に出すのか…？ 奴らにはもったいないぞ？」

男「町の襲撃に失敗したんだろ…他に手はない…。」

男「いや…ある、こいつらは士官学校の生徒たちで一人は教師らしい
こいつらの搜索に人が送り込まれてくるはずだ…
そいつらを利用すれば…？」

男「なるほど…、通路に見張りを立てておけ…
罠を仕掛けて待ち受けるぞ…。」

Episode 01

リシテア「え、戦いが起きているんですかっ!？」

地下通路から駆け戻ってきたドロテアに話を聞き
驚きを隠せない士官学校の生徒たち

リシテア、ベルナデッタ、ヒルダ、マリアンヌ
そして息を切らしたドロテアの5人…

4人はドロテアから

地下通路の奥には
教会から迫害され地上で生きることを許されない人々が
暮らす町「アビス」が存在していること…

他にも犯罪者たちが中心となった勢力が存在し
教会への復讐を企み、
地上やアビスの町から女子供を攫うなど
非道の限りを尽くしているという…

その犯罪者の集団が…今まさにアビスの町を襲撃しており
ベレス達はその救援に向かったという…

ヒルダ「すぐに私たちも助けに向かわないと！」

リシテア「ええ、急ぎましょう！」

ベルナデッタ「で…でも私たちだけで行動しちゃっていいんでしょうか
教会にも知らせたほうが良いと思いますけど…。」

マリアンヌ「たしかに…地下で争いが起きていることを知れば
教会も動かざるを得ないでしょうね…でも…。」

ドロテア「今はそんな時間がないわ、まず先生たちを助けないと！」

リシテア「そうですね、師たちが心配です！」

5人は敬愛するベレスの元へと急ぎ走り出した

地下通路へと足を踏み入れた5人…

ドロテア以外の4人はその広大に広がる地下通路に驚くと同時に恐怖すら感じていた

一步足を踏み入れれば二度と戻れないような…深い闇が広がる

ベルナデッタ「ほ…本当に行くんですかっ？」

ヒルダ「当然でしょ…たしかに不気味だけど…。」

マリアンヌ「ドロテアさんはよく平気でしたね…怖くないんですか？」

ドロテア「う〜ん、たぶん先生とエーデルガルトと一緒にだった…から平気だったのかな。」

リシテア「たしかに…あの二人と一緒になら心強かったでしょうね。」

お化けが苦手なリシテアはこの不気味な地下通路が苦手のようにヒルダに背後からしがみつき離れようとしな

5人は最初に地下に足を踏み入れた際にベレスが残した目印を頼りに地下通路を進んでいく…どの通路も同じように見え目印が無ければ迷っていたことは間違いない

ドロテア「あと少しでアビスの町に辿り着けるはずよ。」

地下通路を進むこと数十分…静寂に包まれた薄暗い地下通路をようやく抜けるかと思われた時…

5人の前に…何者かが立ち塞がった…

ベルナデッタ「ひいいっ!？」

ヒルダ「な…なにっ!？」

ドロテア「これはっ!？」

薄暗くその姿はハッキリとは捉えられない
だがそれが人間ではないことはすぐに理解できた…

ぼんやりと見えるシルエットは人間の骨格とは明らかに違い
通路に響く唸り声は猛獣のように荒々しかった

5人全員が…危険を感じていた
戦いは回避するべきだと…そう直観した

リシテア「こっちへっ!!!」

目印が残された通路を外れ…横道へと逃げ込む5人

謎の怪物は5人の後をすさまじい速さで追いかけてくる

ベルナデッタ「ひいいいいいいい!？」

マリアンヌ「な…なんなのです、あれはっ…?」

ドロテア「知らないわよっ! あんなのがいるなんてっ!？」

必死に逃げながらも壁などに武器を使い可能な限り痕跡を残す
だが…

リシテア「えっ!？」

ベルナデッタ「ひあああああああっ!？」

5人の行く手を遮るように…2体目の怪物が姿を現した

やむを得ず再び横道へと逃げ込む…
転倒したベルナデッタを抱え必死に走る

そして辿り着いたのは…

光が差し込む広大な地下空間であった

リシテア「ここは…明るいですね…。」

マリアンヌ「ええ…でもかなり奥まで迷い込んでしまいました…。」

ベルナデッタ「あいたた…怪物は振り切ったのでしょうか？」

辺りを警戒し見回す3人…

マリアンヌ「えっ!？」

リシテア「ヒルダさんとドロテアさんが…いないっ!？」

ベルナデッタ「えええええ、どどどどうしましょうっ!？」

ヒルダ、ドロテアの二人の姿はどこにもなかった…

怪物から逃れる間に逸れたのか…

または怪物に捕まったのか…

3人の頭の中には不吉な考えばかり浮かんでしまう

慌て混乱するベルナデッタとリシテア

マリアンヌは一見冷静そうだが…

頭の中は真っ白になっていた

そんな時…3人の耳に聞こえてきたのは…
暗闇に包まれ光が届かない通路の奥から聞こえてくる足音

3人ともヒルダとドロテアの二人だと思い一瞬笑みを浮かべたが

闇の中から現れたその姿を見て顔色が変わる…
現れたのは

爬虫類のような外見をした…魔獣…
魔獣であるはずなのだが…二本の足で立ち人間に近い骨格をした
異形の怪物

さらにその奥からは…オオカミのような顔をした
同様の体格の怪物が姿を現し…
さらにもう一体…もう一体と次々に現れ
3人の周囲を取り囲んだ

リシテア「こ…こいつらは一体っ…？」

マリアンヌ「敵なのは…間違いないですね…。」

ベルナデッタ「そんなぁ…数が多すぎますよおっ…！？」

ベルナデッタの言う通り…敵の数が多すぎた
謎の怪物たちが一斉にリシテア達へと襲い掛かかるが

3人ではその数に対処することができず
魔法を発動する時間さえ与えられなかった

リシテア「きゃああああっ!？」

マリアンヌ「やめてっ!？」

ベルナデッタ「いやああああああっ!？」

怪物たちの一撃を受け服が引き裂かれた3人…

リシテアの小さな乳房が大きく露出し
ベルナデッタ、マリアンヌの予想以上に大きな乳房も大きく揺れる

3人は乳房を隠す余裕もなくただ逃げ回るが
複数で襲い掛かる怪物を相手に成すすべなく捕らわれてしまう

マリアンヌ「うっ…くうっ…!？」

ベルナデッタ「ふええっ…ベルたちここで終わりですかあ…!？」

リシテア「こ…こんなところでっ…!？」

怪物の鋭い牙が目の前に迫り…最後を覚悟した3人…
だが…

リシテア「ひゃああっ!？」

突然体に走った謎の刺激…
視線を下ろしてみると…
オオカミのような顔をした怪物が
リシテアのスカートの中へと顔を潜り込ませ…
激しく下着の上から秘部を舐めまわしていた

リシテア「い、いやああああああっ!？」

両足をバタバタと動かし暴れるリシテア…
下着の上からでも激しく動く舌の感覚はしっかりと伝わり
リシテアの秘部から大量の愛液があふれ出す

リシテア「あっ…だ…だめええっ!？」

歯を食いしばり必死に耐えるリシテア…
ふと視線をマリアンヌたちの方へと向けると…

マリアンヌ「あっ…ああああああっ!??？」

豊満な乳房を怪物に舐めまわされ喘ぐマリアンヌ…と

リシテアと同様に秘部を舐めまわされるベルナデッタの姿があった

ベルナデッタ「ああああああああっ!だめええええっ!??」

マリアンヌ「な…何が目的なのっ…?」

怪物に弄ばれるという屈辱に必死に耐える3人…
抵抗もできず…さらに怪物たちの目的がわからず
ただ体をもてあそばれ続ける3人…

そして…

下着を剥がれ…両足を大きく開かされたリシテア…

背後から両足を抱えられたベルナデッタ

仰向けになったまま両足を抱え上げられたマリアンヌ…

その姿勢になった時…3人は怪物たちの真の目的を理解してしまった

怪物たちの股間から延びる固くなった肉棒
その肉棒をグイグイと秘部へと押し当て…挿入しようとしていた

ベルナデッタ「ひいいっ!??」

マリアンヌ「や…やめてっ…!？」

リシテア「そ…そんな大きいの…入らないですからっ！！」

明らかに彼女たちの体と比例していない巨大なサイズの肉棒だが…

リシテア「ひぐっ！？」

肉棒の先端が押し当てられ僅かに挿入してきただけで雷魔法を受けたような激しい刺激が全身に走った

ベルナデッタ「ひあああああっ！？」

マリアンヌ「あああああああっ！？」

じわじわと挿入されていく肉棒…

リシテア「あっ…あああっ…だめっ…痛いっっ！？？」

必死に抵抗しようとするリシテアだが…背後から両手を拘束され怪物の肉棒にまたがるリシテア…

必死に両足に力を込めて肉棒をこれ以上挿入させないように踏ん張るが

リシテア「あああああああっ！？」

極太の肉棒が挿入されていく激しい刺激に耐え切れず…両足から力が抜けリシテアの膣内に肉棒が一気に突き刺さった

リシテア「いやああっ…！？痛っ…動かないでくださいっっ！！」



ククク

んん

きやああああっ!!
ダメ、こんな太いもの入らないっ!!
うっ...いやっ、痛っ...!!

ズズズ

ズズ

ズズ

ベルナデッタ「いやあああ、そんな…
ベルの中に入れてきてますうっ!??」

両足を抱え上げられ自分の膣内に肉棒が挿入されていく様を
じっくりと見せつけられるベルナデッタ
全身を大きく痙攣させ悶え…
激しい刺激に耐え切れずすぐに大量に潮を噴き上げていた



怪物にまんぐり返され、
肉棒がじわじわと挿入されていくマリアンヌ

マリアンヌ「あはっ…あああああっ…だ…だめ…っ!？」

大量の愛液を垂れ流しながら…消えそうな声でつぶやく

怪物は肉棒を根元まで挿入させマリアンヌの子宮を強く刺激し
激しく腰を振り交尾を開始した



地下の空間で怪物たちに犯される3人…

リシテア「う…うぐうっ！???」

怪物たちは単調な動きでひたすら腰を振り続ける…
全員が処女であるリシテア達は初めてを奪われたという絶望感
であふれる涙が止まらなかったが

その体は初めての交尾を喜んでいるかのように…
素直に反応してしまう

リシテア「あはああっ…ああああああっ！？」

大量の潮を噴き上げてしまったリシテア…
体を痙攣させ必死で呼吸を整えようとする

リシテア「なんで…こんなに気持ちいいのっ！？」

そしてリシテアは自分の体に起きた変化に気づかされた…
苦痛しか感じられなかった交尾が
いつの間にか痛みではなく快感へと変わっていたことを

マリアンヌ「あはああああああああっ！？」

ベルナデッタ「ふああああああああっ！??」

リシテアの視線の先で何度もイカされ潮を噴き上げる二人

リシテア「魔力が…私の体に…魔力が流れ込んでいるっ…？」

怪物と1つになった肉棒から
異常な量の魔力が流れ込んでいることにリシテアは気づいた

その魔力が体の感度を上げ…同時に苦痛を癒していること…
複数の紋章を宿す感覚の鋭い彼女だから気づけた…

リシテア「なんなのっ…こんな怪物…まるで…」

まるで交尾をするために生み出されたような怪物…
どんな相手でもスムーズに
生殖行動を行えるように調整されている魔力…
なぜこんな怪物が地下に潜んでいるのか…すべてが謎だった

だが、その力はたしかなもの…

リシテア「あああああああっ!??」

人間の魔力とは全く性質の異なる魔力らしく
リシテアの魔力をもってしても…その力には抗えなかった

ベルナデッタ、マリアンヌの二人は…すでに限界に達していた

ベルナデッタ「あはあっ…あああああっ!??」

マリアンヌ「あああああああっ!??」

体内に流れ込んだ怪物の魔力と自身の魔力が混ざり合い
体の感度は高まり意識は混乱する

それは媚薬に近い効果を発揮していた

ベルナデッタ「あはあああ、もうダメですうっっ!??」

マリアンヌ「ひあっ…私の中に出てるううっ!??」

もはや限界となった二人にとどめを刺すかのように
怪物は二人の膣内に大量の精液を射精した



大量の精液を射精され大きく膨らんでいく腹部…

痙攣し喘ぐ二人の口からは
言葉にならない悲鳴があふれ続けていた



リシテア「あああ、私も…もうだめえ……。」

二人よりも強い魔力を持つリシテアは…懸命に耐え続けていた
だがそれをついに限界を迎えてしまう…

リシテア「あああっ！？ あああああああっ！???」

膣内で激しく動く肉棒の感覚がより鮮明になっていくようだった
秘部からあふれる愛液が止まらず…
口からはだらしなく唾液を垂れ流していた…

頭の中は真っ白になりただ快感に体を捧げていた

そして怪物がリシテアの子宮へと大量に射精を開始したとき
彼女の快樂は最高潮に達した…

リシテア「ひああああああああっっ！???」

射精され大きく腹を膨らませたまま悶えるリシテア…

リシテア「…あはああ…ああああ…！？」

強烈な射精を受けあまりの快樂に押しつぶされそうになる
視線が定まらず意識は朦朧としていた



カキカキ

ムム

あああああつ...!!
お腹が...ダメ
おかしくなっちゃいまっ!!

ゴウゴウ

ゴウゴウ

怪物は射精を終えると…また新たな怪物が彼女たちの体を抱き…
激しく腰を振り出す…

リシテア「あっああああっ！??」

ベルナデッタ「あはああああっ！？」

マリアンヌ「あはああああんっ！！」

怪物に犯され続け精液塗れとなった3人…

再び犯される3人と怪物たちの様子をじっと見つめている
男たちの姿があった…

男「ちっ、こんなところにいやがったぞ…。」

男「だがあの女たちが相手してくれて助かったな…
これでしばらくは時間が稼げる…。」

男「ああ、…捕らえた二人の女たちを加えて…数は十分か？」

男「十分…とは言えないがもう時間がない…
これで乗り切るしかないな…。」

Episode 02

アビスの奥に潜む怪物たちに襲われたリシテアたち

散々怪物たちに体を弄ばれたのち…

ベレスたちと共にアビス奥に築かれた犯罪者たちが築いた町へと
輸送された

教師や生徒たちとの再会を喜ぶ仲間たちだが
檻に放り込まれた
状況は最悪と言っても過言ではない

犯罪者たちだけであればコンスタンツェ達…
アビスの町と協力して対応できるかもしれないが
謎の怪物達までが潜んでいるとなると…難しくなる

エーデルガルト「それにしてもその怪物…魔獣なのかしら
いったいどうして…？」

ヒルダ「地下のダンジョンに魔獣がいる…っていうのは
そんなに不思議じゃない気もするけど。」

リシテア「問題は…どうして教団が対処しないのか？ですよ。」

マリアンヌ「そうですね…
軍を送り込めばすぐに退治できるはずですが。」

コンスタンツェ「セイロス教団は地下の事など興味ないのですわ…。」

ベレス「……。」

コンスタンツェの言う通り教団は地下の存在を知らず
黙認しているようだった
コンスタンツェ達の暮らす町から奪ったであろう様々な物資が
この犯罪者の町にも溢れている…
教師として数か月…士官学校に勤めているが
物資が奪われるといった事件や噂について聞いたことはない

ベレス「やはり教団はすべてを知っているんじゃないか…。」

犯罪者たちの存在も…魔獣の存在も知ったうえで放置している
つまり教団は地下の問題に関わる気はなく…
教団からの助けは期待できない…という結論に至ってしまった

そして…

魔獣が存在する理由や原因は未だに不明な点が多い
過去にはゴーティエ家に伝わる英雄の遺産「破裂の槍」を持ち出した
人物が魔獣へと変貌する様を目撃したこともある

ベルナデッタ「教団が…レア様もすべて知ってるんでしょうか？」

ドロテア「知っているなら魔獣の存在を放っておくわけないでしょ？」

エーデルガルト「知った上で…黙認しているのかもしれないわ。」

ハピ「…何か心当たりがあるみたい…。」

魔獣の存在に一番敏感な反応を示したエーデルガルト
何か思い当たることがあるのか表情が重い

???「疑問を抱くのも無理はありませんな…。」

ベルナデッタ「ひいっ!？」

ベレス「…誰？」

捕らわれのベレス達の元へと現れたのは…
セイロス教団…それも高位の司祭が纏うローブを身に着けた男

ガルク＝マク修道院で見た覚えのないその顔…
高位の司祭のはずなのだが…その雰囲気は無い

エーデルガルト「教団の司祭ね…やはりすべてを知っていた…と。」

司祭「そうです、レア様はすべてを知っておられますとも…。」

コンスタンツェ「知っていて…アビスの町の危機を知っていて
何もしなかったのですかっ!？」

ハピ「やっぱり教団は…信用できない…。」

アビスで暮らし
その現状をよく理解している二人は
怒りを抑えられない様子だ

司祭「怒りは無理ありませんが…今は時間がありません…
おいっ!」

男「へいっ!」

コンスタンツェ「な…なにををするのですっ!？」

ハピ「離せっ!？」

ヒルダ「え、私たちもっ!？」

ドロテア「や…やめて、どこ触ってるのよっ!？」

檻から連れ出された4人…

ベレス「やめて…生徒たちを離してっ!!」

檻の中から必死に叫ぶベレス…そして生徒たち…

だが、司祭と男たちはその声に耳を貸すことはなく
4人をどこかへと連れて立ち去っていった…

コンスタンツェ「一体、わたくしたちをどうするつもりかしら…？」

ハピ「きっとまた私たちを犯して楽しむ気なんだよ…。」

ハピの言葉に顔色がより悪くなるコンスタンツェ達

ドロテア「こんな時にそんなこと…言わないでくれる？」

ヒルダ「なんとか隙を見て…逃げ出さないで…。」

このままではまた男たちの餌食となる…

それだけは絶対に避けたい4人は逃げ出す隙を伺う…

司祭「さて…着きましたよ…。」

脱出する隙を見つけることもできず…

目的地へと連れてこられてしまった4人

ドロテア「ここは一体…？」

目の前に開いた巨大な穴…その奥には

ヒルダ「なにあれ…何かいるっ!？」

ハピ「あれは…魔獣…？」

コンスタンツェ「やはり魔獣が…それもこんなに…？」

見える範囲だけでも複数の魔獣の姿があった

司祭「さて…では簡単に説明してさしあげましょう…。

あなたたちには…あの魔獣たちに生贄として差し出します。」

ヒルダ「なっ!？」

コンスタンツェ「なんですってっ!？」

司祭「あの魔獣たちはレア様が作り出した魔獣たちで非常に困った生態をしておりますね…
普段は大人しく害は無いのですが、月に何度か…
繁殖相手を求めて狂暴化することがあるのですよ。」

ドロテア「繁殖…相手…？」

ハピ「なに…どうということ…。」

司祭「つまり狂暴化する度に
メスを求めてアビスの町を襲っているわけですね、
数十年前にはアビスの外まで溢れ出てきましてねえ…
教団の女たちにも多数被害が出てしまったのです。」

平然とした表情で淡々と語る司祭…
その様子に恐怖し
コンスタンツェ達4人の表情は青ざめていく

司祭「それ以来、教団としては魔獣たちを地下へと抑え込むためにあらゆる手段を取ってきたのです…
犯罪者たちを地下に押し込めたのもその手段の一つですね。」

ヒルダ「そんなこと…レア様に知られたらどうなるか!？」

司祭「もちろんすべてレア様の御指示の元で行われております、
なぜこんな面倒で厄介な魔獣を
大切にしていれうのかは理解できかねますが…、
何か理由があるのでございましょう…
私はただの管理人…レア様に従うだけでございます。」

コンスタンツェ「そ…そんなっ…!？」

ハピ「い、いや…っ…。」

4人は男たちに放り出され…大穴の中へと滑り落ちていった

ヒルダ「いたたっ…。」

ドロテア「こんなことって…。」

コンスタンツェ「一体何を考えているのかしら…。」

ハピ「とにかく…ここから逃げ出さないと…。」

魔獣たちで溢れるアビス最奥へと放り出された4人
既に4人の周囲には複数の魔獣たちが集まっている…
激しく興奮し鼻息を荒くした魔獣たちの目的は
間違いなく自分たちの体であるのは間違いない…

魔獣の股間から延びた肉棒がそれを確信された

ハピ「戦っても勝ち目はないよ、うまく狭い場所まで逃げ切れれば…。」

コンスタンツェ「それが最善ですわね…。」

ヒルダ「うん…それじゃ二手に分かれて…。」

ドロテア「わ、わかったわ…！」

コンスタンツェ達は二手に分かれ敵の注意を分散させつつ
大型の魔獣が入り込めない狭い通路に逃げ込むために走り出す

魔獣たちの力は強大でこの人数で対応することは難しい
だが戦わなければ…決して逃げ切れない相手ではない

巨体に似合わず素早い動きを見せるオオカミのような外見をした魔獣…
ドロテアは目くらましに炎の魔法を放ちその視界を一瞬奪った

目がくらみ大暴れする魔獣…

ドロテアとヒルダはその隙に魔獣の背後にある通路へと逃げ込む

コンスタンツェとハピも同時に走り出しており

ドロテアの魔法で注意がそれた隙について、二人の逃げ込んだ通路とは別の通路へと逃げ込んだのだった

コンスタンツェ「はあ…はあ…うまく逃げ切れましたわね…。」

ハピ「うん…あの二人には感謝しないとね。」

魔獣の隙をついた魔法の展開や身のこなし

さすが士官学校で鍛え上げられた強さだと感心させられる

地下という狭い空間で経験を積んでいる自分たちとは違う戦い方だ

ハピ「それは仕方ないよ、

私たちには地下での戦い方が身につけてるから。」

コンスタンツェ「そうですわね…。」

狭い地下では戦う上で様々な制限が存在する

狭い通路では長い武器は振り回せず、

大規模な魔法を使えば味方を巻き込む恐れさえある

そんな戦い方に慣れてしまったコンスタンツェ達には

ヒルダやドロテアたちのような大胆で豪快な戦い方が

羨ましく見えてしまう

コンスタンツェ「再会したらお礼を言わないといけませんわねっ！」

ハピ「…そうだね…。」

コンスタンツェとハピは魔獣を警戒しつつ狭い通路を進む

ヒルダとドロテアは狭い通路へと逃げ込むことができていたのでひとまず無事であるはず…

通路の先で無事に再会できればいいのだが…
暗闇に包まれた通路の先に何があるかは誰にもわからない

コンスタンツェ「あれは…!？」

ハピ「灯りだ…それも…太陽の光…？」

通路の先に広がった空間…天井から開いた隙間から差し込む光はまぎれもない陽の明かり

コンスタンツェ「通路を抜けた先は…洞窟でしたわね。」

ハピ「…まさか洞窟に通じてるなんて…
でも、洞窟ならここから地上へと通じているかもしれないよ。」

コンスタンツェ「その可能性は高いですわ…
でわ、こうして…ヒルダ達に私たちが
ここを通った印を残しておきましょう。」

コンスタンツェは石を拾い、石の壁に印を刻み込んだ

だがその石壁を刻む音が…魔獣を引き寄せてしまう

突然自分たちの背後に衝撃と共に現れた魔獣

コンスタンツェ「きゃああっ!？」

ハピ「ああああっ!？」

衝撃で吹き飛ばされ地面を転がる二人…
うつ伏せになり尻を突き出した二人の姿勢を見た魔獣は
すぐに次の行動に出たのだった…

コンスタンツェ「ひいっ!？」

ハピ「な…なにっ!？」

いつの間にか2頭に増えていた魔獣はそれぞれコンスタンツェハピの上に覆いかぶさるように密着する…そして二人のスカートに噛みつき牙で切り裂く…

コンスタンツェ「な…何かが…私のお尻に当たってますわっ!？」

ハピ「うそ…これってっ!？」

興奮し固くなった肉棒が二人の尻に押し付けられる…
下着の上から秘部を激しく擦る肉棒…
熱い肉棒に秘部を刺激され二人は悲鳴をあげる

コンスタンツェ「ひあああああっ!？」

ハピ「うあああ、だ…だめめええっ!？」

愛液があふれ出しぐっしよりと湿っていく下着…
魔獣は肉棒を挿入させようとさらに激しく腰を振り秘部を刺激する

コンスタンツェ「あはあああっ!？」

ハピ「あああああっ!？」

激しい圧力で押され悶える二人…
あまりの快感に体が痺れ抵抗することもできない
そして下着は次第に肉棒の動きでずらされていき
魔獣の肉棒と秘部がしっかりと密着した

そして肉棒は離れることなく…膣内へと入り込んでいく

コンスタンツェ「あああああっ！？ 挿ってますわっ！！！」

ハピ「あぐっ…だめ…大きすぎ…！？？」

人間とは比べ物にならないほど巨大な肉棒の先端がすっぽりと二人の膣内へと入り込んでいた



コンスタンツェ「あがあああああっ!？」

ハピ「あああああ〜っ…!?!?!」

魔獣は激しい勢いで腰を振り二人の体を大きく揺さぶる
豊満な乳房を大きく揺らし悶えるコンスタンツェ…
肉棒が押し上げ…その勢いで全身が大きく振り回される



コンスタンツェ「こ…こんなのっ…いやあっ!？」

逃れようにも…コンスタンツェと
ハピの膣内の奥まで肉棒は入り込んでおり
簡単に逃れることはできない

ハピ「あああっああっ!？奥に当たって…る…っ!？」

肉棒が激しく子宮を押し上げ悶えるハピ…

その激しい交尾に苦しむ二人だったが…体には大きな変化が訪れる

コンスタンツェ「あはあああああ!？な…なんなのっ…これっ!？」

ハピ「体が…熱くなって…敏感になったみたい…？」

先日リシテアに起きた変化と同じ…

魔獣の魔力が二人の体へと流れこみ…自身の魔力と混ざり合い
それが体内で異常に反応し合い媚薬のような効果を発生させていた

突然訪れた激しい快感に耐え切れず潮を噴き上げた二人…

コンスタンツェ「おかしいですわ…こんな気持ちいいなんて…
私どうなってしまったの…!？」

ハピ「あはあああ…気持ちいいっ…!？」

コンスタンツェ「ハピ…しっかり…こんな魔獣相手に感じるなんて…
うああっ…なんで…こんなに気持ちいいのっ…!？」

うっとりとした表情で魔獣に犯されるハピ…
コンスタンツェも苦痛から逃れるために…
自然と快楽を受け入れてしまう

コンスタンツェ「あはあああああっ!？」

ハピ「あああああああっ!？」

ただ叫び続ける二人…

その声が悲痛な叫びなのか…それとも快楽に悶える声なのかは二人にもわからなかった…

ただ一つ確実なのは

二人の体が魔獣との交尾を受け入れてしまったという事実

そして…

二人の腔内に魔獣の大量の精液があふれると同時に

今までの何倍もの魔力が一気に流し込まれ

極限の快楽が二人へと襲い掛かった



コンスタンツェ「あっ…あがっ…あああ…。」

ハピ「ああああ…ああ…。」

あまりにも強烈で大量な射精に腹部は大きく膨れあがり…
射精の勢いでそのまま二人の体は
大きく前へと吹き飛ばされそうになる

全身が精液に塗れたまま放心する二人…
しかしその口元はうっすらと笑みを浮かべていた



ドロテア「はあ…はあ…コンスタンツェとハピも逃げきれたかしら？」

ヒルダ「狭い通路に入るところまでは見えたから…大丈夫だと思う。」

コンスタンツェとハピと別れたのち
再び合流することを目指して通路を進んでいる二人…だが

ドロテア「なんだか…嫌な感じがする…。」

ヒルダ「ええ…なんなのかしらこの粘液みたいなもの…。」

二人が進もうとする先には…
得体のしれない粘液があちこちにへばりついており
行く手を阻もうとしていた

ドロテア「とにかく進むしかないわ…。」

ヒルダ「ええ…待って…あれって…！？」

ヒルダが指さした先には…うずくまった一人の男の姿があった

男たちに弄ばれた後である二人は男の姿を見てさらに警戒を強める

ゆっくりと忍び寄り…その様子を伺う…

男「う…うがあああ…。」

ヒルダ「！？」

ドロテア「やっぱり…普通じゃないわ…。」

男は明らかに普通ではなかった…
口からは鋭い牙が伸び…指の爪は獣のように鋭い…

その様子はまさに、魔獣になりかけの人間のように見える

二人は男から距離を取り離れようとしたが…

ドロテア「えっ…足に何かっ!？」

足元に感じた違和感…
見れば何か触手のようなものが足首に巻き付いている

ドロテア「きゃあああっ!？」

ヒルダ「な…なにっ!？」

男を警戒していたヒルダが振り返ると…
そこには触手に絡みつかれ宙吊りにされたドロテアの姿があった

スカートが捲れ下着が丸出しとなったドロテアを
ヒルダは助けようと近づいた…
しかし…

男「がああああああっ!？」

ヒルダ「きゃああああっ!？」

まるでその隙を待っていたかのように狂暴になった男が
ヒルダへと飛びついてきたのだった…

ヒルダ「いや、離してええっ!？」

男に抱き着かれたヒルダ…
その体は驚くほど冷たく…まるで感じられない…
男への強い恐怖を抱くヒルダだったが…

ヒルダ「いや、そこはっ!？」

男はヒルダの服を引き裂き…
露になった秘部に舌を伸ばしてしゃぶりついた

ヒルダ「いやああああっ!？」

ドロテア「あああ、ヒルダっ!？ あっ…だめそんなところっ!？」

触手に絡みつかれたドロテア…
無数に伸びる触手はドロテアの衣服の隙間から侵入していく
強引に入り込まれたため…ボタンを引きちぎり衣服は
次第に脱げていく…

そして…

ドロテア「あああああ、そこはだめえええっ!??？」

下着の間から膣内へと潜入した触手…

複雑に動き回る触手がドロテアの膣内の奥深くへと入り込んでいく…

触手に刺激されドロテアの秘部からはすぐに大量に愛液があふれ出す



きゃあああっ!?
な…なんなのよコレっ!?
ダメ…そんなところ…入らないで!

ヒルダ「あはああああっ!？」

男に舌で膣内をかき回されたヒルダは
あまりの快感に潮を噴き上げていた

ヒルダ「はあ…はあ…やめて…もう…離してっ……!？」

だが男はヒルダの豊満な乳房を前にしてより興奮し
股間の肉棒を反り立たせ大きく咆哮した…

ヒルダ「あああああああああっ!？」

カづくで男に押し倒され…

肉棒を強引に膣内へと押し込まれ…激しく下から突き上げられる



男の激しい腰遣いに悶えるヒルダ…

肌がぶつかり合う音がうすぐらい通路に木霊していた

この男の正体は…まさにヒルダ達が想像した通り…
魔獣へと変貌しつつある人間…

ヒルダ達がこのアビスを訪れる数日前…
生贄が滞っていたアビス最深部で魔獣たちが暴れだし
抑えようとした数人の男たちが犠牲となった…

犠牲とは…死んだ者のことではなく
魔獣たちに犯されてしまった男たちの事を示す
そう、アビスに潜む魔獣たちは性欲を満たすために時に
男にさえ襲い掛かるという恐ろしい生態を持つ

そして条件は不明だが
魔力の低い人間は狂暴化しやがて魔獣と化してしまうのだという…
魔力の強さだけではなく紋章の有無などが
魔獣化する条件ではないかと推測されているが…未だ謎が多い

凶悪な犯罪者たちであっても…それは何よりも恐ろしく
それを避けるため…犯罪者たちはアビスの町を襲撃し…女を攫う…
そんな過酷なアビスで生き抜くためか…
犯罪者たちの団結力はすさまじいほどに強い

そんな事実を知るわけもなくただ男に犯されるヒルダ…
ヒルダを犯す男の目は赤く輝き…もはや人間とは言えない

ヒルダ「あっ…ああああああっ！！??」

その体力も人間とは思えないほどに底なしであった
激しい勢いで腰を動かし続けているが…少しも休むことはない…

ヒルダはその間…何度も潮を噴き上げ絶頂を迎えている

ヒルダ「あがっ…あっ…あああっ……。」

あまりの激しさと快感にヒルダの体力は限界に達しようとしていた

ヒルダ「あっ…あああああ！！???もうだめえ…!？」



男に大量に中出しされ快樂の限界に達したヒルダ…
そのまま男の胸へと倒れこみ…ビクビクと体を痙攣させた

魔獣化しつつある男は未だ性欲が収まらないのか…
ヒルダの尻を掴み激しく腰を振り続けていた…

ドロテア「あはあああああああつ!?!」

ヒルダのすぐ横ではドロテアが
すでにぐったりと体を触手に預けていた

膣内だけではなく尻穴にまで触手は入り込み…
激しく内部で暴れまわる…

ドロテア「いやっ…お尻はだめええっ!!?!」

そう叫び必死に暴れていたドロテアだったが…

今では触手が尻穴に入り込むたびに気持ちよさそうに悶える

ドロテア「あああああああん…!!!?!」

2本の触手に同時に責められ…再び大量に潮を噴き上げるドロテア…

もはや抵抗の意思すらなく…ただ触手を持つ魔獣に弄ばれるだけであつ



魔獣の潜む最下層へと放り出されて数十分…
完全に快樂の虜となった女たち…

司祭「ふむ…少しは魔獣たちの暴走も収まったようですね…
でもまだ足りないようです…。」

司祭の頭に浮かんだのは…ベレス…エーデルガルト…リシテアの3人

司祭「あの者たちの紋章ならば…
きっとレア様も満足する結果となるでしょうな…。」

Episode 03

コンスタンツェ達がアビスの最奥へと連行されてから
数時間後…

彼女たちの通った道を辿るように進むのは

ベレス、エーデルガルト、リシテアの3人…

しかも3にともお揃いのメイド服を身に着けていた

エーデルガルト「なんでこんな格好しなきゃいけないのよ…。」

このメイド服はガルク＝マクでも正式採用されている見覚えのある
デザインであったが…

多少改造されているのか、スカートの丈が短く
生地は薄く乳首の形まで鮮明に判ってしまう

しかも元々、胸元を強調するようなデザインをしているためか
ベレスの豊満な胸元は驚くほど強調されてしまっている
次いでエーデルガルト…普段は制服の下にうまく隠しているのか
想像以上に大きく形の良い乳房がメイド服の下から自己主張している

リシテア「…むう…。」

歩くたびに大きく揺れるその魅力的な乳房を見て眉間に
シワを寄せるリシテア

リシテア「生贄にささげるため…と言っていましたが
これは完全にあの司祭の趣味だと思えますね。」

ベレス「そうかもしれないね…

魔獣がこの姿を見て興奮するとは思えないし…。」

ベレス達のメイド姿を見た時の犯罪者たちの興奮ぶりは異常だった
犯罪者と並んで叫んでいた司祭の様子から見ても
彼の趣味である可能性は高い…

コンスタンツェ達が生贄にと連れ出されたのち…
司祭と取引することになったベレス達…

ベレス「私が生贄になれば…他の生徒たちは助けてもらえるのね？」

司祭「ええ、約束しましょう…。」

既に絶望しつつあるベルナデッタやマリアンヌ…
まだ希望を捨てていないエーデルガルト、リシテア…

ベレス「連れ出されたヒルダ達…
コンスタンツェ達も助けてくれるなら…。」

司祭「…わかりました、
彼女たちがそう願うなら必ず連れ戻しましょう。」

司祭の言葉を信じるしかなかった…

生徒たちを守るために
一人生贄にささげられるために檻から出ようとするベレス

そこへ…

エーデルガルト「待ってっ！」

ベレス一人を犠牲にすることはできないと…
同行することを決意したエーデルガルト…
さらにリシテアまで じっとしていただけないと…同行を申し出た

ベレス「約束は守ってもらうわよ？」

司祭「もちろんです、この先にいる魔獣たちの相手をしてもらえれば…約束は果たしましょう。」

エーデルガルト「くっ…帝国皇女のわたしが…魔獣の性欲処理の相手になるなんて…。」

リシテア「すべてが終わったら…しっかりと償ってもらいますから…。」

3人が案内されたのは…アビス最深部まで続いている巨大な空間

そしてその空間には…様々な姿をした魔獣が彷徨っていた

ベレス「あれは…馬…？」

リシテア「それに…魔獣化した人間でしょうか？」

エーデルガルト「おかしな触手まで蠢いてるわね…。」

司祭「ええ、あれらが私たちの頭を悩ませているのですよ…。」

司祭によれば…生贄を得られなくなった魔獣たちは
種族性別問わず誰でも襲うようになっていった

3人の前にいるのは魔獣に襲われ魔獣化した馬や人間であるという
触手に至ってはもはや何が魔獣化したのかさえわからないという

司祭「でわ、魔獣の御相手…よろしく願いしますね…。」

ベレス「…そんなんっ…。」

エーデルガルト「こいつらの相手を…。」

リシテア「私たちが…？」

魔獣たちはベレス達の姿を見てすぐに近くへと迫ってくる…
もはや逃げることもできない…

ベレスは代表として…まず一步前に進み
馬型の魔獣の前に体を差し出した…

真っ赤に顔を染め体を震わせるベレスの乳房へと顔を押し付ける魔獣

そのまま服を啜えると…薄い生地メイド服は簡単に引き裂け
ベレスの豊満な乳房が大きく揺れながら露出した

ベレス「うっ…うっ…！？」

乳房を激しく舐めまわす馬型の魔獣…

それと同時に、リシテアへと襲い掛かった人型の魔獣…
その顔はもはや人間とは言えず、巨大な口と鋭い牙
赤い瞳を持ち尻尾まで生えてきている…
人間としての面影は体の一部にしか存在していなかった

リシテア「うっ…ああああっ！？」

女に飢えているのか…魔獣はすぐにリシテアを押し倒しその顔や体…
舌と指で撫でまわす

リシテア「あああ！？　そこはっ！！？」

魔獣に下着を剥がれ秘部を丸出しにされてしまったリシテア

リシテア「ひいっ…こんな太いの…無理いいいっ!??」

覚悟を決めて着たはずだったが…極太の肉棒を秘部に押し付けら
怯えるリシテア
そして…

リシテア「あああああああっ!??」



極太の肉棒がリシテアの膣内へ一気に挿入されていった…

一瞬で肉棒が最奥まで到達し…
激しいピストン運動が繰り返される

リシテア「あああああ！いや…
すごい魔力が…流れ込んでい来るうう！？」

エーデルガルト「そ…そんな…。」

エーデルガルトの全身へと絡みついた触手…
触手に吊られ両足を大きく開き下着が丸見えになっている

下着にはうっすらと染みが現れ…次第に大きくなっていく…

エーデルガルト「うっ…ううあああっ！??」

触手が全身に絡みつき…衣服は避け乳房が大きく露出する
その乳房や太腿に触手が擦れ…エーデルガルトの体を敏感に刺激してい

この地下に足を踏み入れた時点で
既にリシテア…エーデルガルト、ベレスの体には魔獣たちが放つ
魔力が少しずつ流れ込んでおり

その体はじわじわと敏感な体へと変貌していた

エーデルガルト「まさか…こんな体に影響があるなんて…
ううああああっ！??」

下着を履いたまま潮を噴いてしまったエーデルガルト
ぐっしょりと濡れた下着は完全に透けてしまい
秘部の形まで鮮明に確認できる

触手はそんな下着の隙間から潜入し、やがて膣内へとゆっくり
入り込んでいく

エーデルガルト「あっ…あああああああああっ！??」

触手が膣内の奥へと侵入し喘ぎ叫ぶエーデルガルト

以前に男たちに弄ばれた時の何倍もの快感が押し寄せ…
頭が真っ白になっていく



ベレス「ううっ…ああっ!？」

乳房から尻まで…

全身を馬型の魔獣に散々舐めまわされたベレス…

舐められ気づいたこと…

それは自分の体が何倍も敏感になり…

魔獣相手でも不快感を感じにくく

なっていることだった

自然と魔獣たちを受け入れてしまう…

ここはそんな不思議な魔力で満ちていた

ベレスは魔獣と交尾するため…自ら石で作られた台の上へと

仰向けになり

下着を脱ぎ魔獣に向けて両足を大きく開く

ベレス「はあ…はあ…はあ…。」

自分でも理解できないほどに興奮していた

少しずつ迫ってくる魔獣…

その股間から伸びる肉棒は力強さを増し大きくなっていく…

ベレス「あああ…はやく…ここに下さいっ…。」

腰を振り自ら肉棒を求めていたベレス

自分でも信じられない行動を取っていたが

高まる性欲を抑えきれない

ベレス「ああああああっ! 入ってきたああっ!??」



うっ!? あぐっ!?
すごくっ…大きいよっ!
奥まで届いて…すごい…
気持ちいいっ!!

極太の肉棒が強く子宮を押し上げる…

ベレス「あふっ…すごい…気持ちいいよっ!??」

口元には笑みを浮かべ快楽を楽しんでいた

ベレス「ああああ、こんな気持ち初めてっ!??」

長い間父親と共に傭兵稼業を続けてきたベレス
その美貌と豊満な体から異性からの誘惑は多かったが
強面の父親のおかげか近づける男たちはほとんどいなかった

そんなころの自分からは想像できないほど…
感情を表に出し快楽に身を預けている今の自分…
何も考えずにただ楽しむことに夢中になっていた

ベレス「あっ…ああああイクううっっ!？」

相手が魔獣ということも忘れ大量の潮を噴き上げたベレス

そこには「灰色の悪魔」と呼ばれたころの面影は残されていない

ベレス「あああ…私の中に…たくさん出してっ!!」

より激しさを増していく魔獣との交尾…
ベレスの体もそれに応えるようにより敏感に…
快楽に貪欲になっていく

体が魔獣の精液を求めている…
溢れる精液で膣内が満たされていくことを望んでいる
ベレスの頭の中はそのことでいっぱいだった

そして…
その期待に応えるように魔獣はより激しく腰を振りはじめ
ベレスの膣内に大量の精液が射精されていった

ベレス「ああああああああ、私の中に…たくさん出てるうう!!」



あがつ…ああああつ！
あはつ…もうダメ…
そんなに入らないよおつ…！

大量の精液が膈内に溢れ続ける…
腹部を大きく膨らませたベレスは…満足げな笑みを浮かべていた…

ベレス「あああ…こんなにたくさん出て…
私、魔獣の子を…妊娠しちゃう…。」

エーデルガルト「ああああ、師っ！！？」

リシテア「あんな…気持ちよさそうにっ…？」

ベレスの様子を見ていた二人は興奮を抑えきれなかった
あんな気持ちよさそうに喘ぐベレスの姿を見たことはない
性欲が高まり…ベレスのように快楽に貪欲になっていく

リシテア「あああ、私の中にも…師みたいに出してっ…！」

エーデルガルト「私も…師みたいに…気持ちよくさせてっ！！」

より快楽を求めベレスと同じ経験をしてみたいという欲望が高まる

リシテアの小さな体をより激しく攻め立てる男…
エーデルガルトの膣内…そして尻穴を同時に責める触手

大量の潮を何度も噴き上げ喘ぎ続ける二人
もはや普段の冷静な二人の姿は少しも残されていない…

エーデルガルト「ああああっ！？出てる…何か出てるうう！！」

エーデルガルトの膣内に触手の先端から放出された粘液が溢れていく
精液と酷似したその粘液はエーデルガルトに絡みついた何本もの触手の
先端から同時に放出され
そしてその中には…
触手の先端から産み落とされた無数の卵が含まれていた

エーデルガルト「あああああっ、
何か私の中に…たくさん溢れてるっ！？」

体内に卵を産み落とされるという初めての感覚に
最高の快感を感じ何度も潮を吹くエーデルガルト
膣内を逆流した卵が…秘部から ポコポコと幾つも落ちていく…



あはあああっ!!
私…たくさん産みつけられてる…
こ…こんな感覚はじめてっ…
も…とたくさん…私の中…ください!

ゲゲゲ

ドロドロ

ドロドロ

リシテア「あああああっ！！師っ、私にも…出てますうっ！！」

男の強烈な射精を受け全身をガクガクと震わせるリシテア
想像を超えた快感に襲われ体が喜んでいるようだった



あはあっ…!?
師見てくっださいっ…!
私のアソコも…
お口の中も精液でいっぱいです…!

ぐったりとした3人の美女たち…

射精を終えた魔獣たちのさらに奥から…また別の魔獣が姿を現しベレス達の元へと近づいていくと…

ベレス「あっ…また…中に出してくれるの…?」

ベレス、エーデルガルト、リシテアは精液で満たされた秘部を魔獣たちへと向けてさらに快楽を求める

別の魔獣の肉棒を抵抗なく受け入れるベレスたち

司祭「おお、魔獣たちを手懐けている…！？
しかも…魔獣化することもなく…！？」

まるでペットのように魔獣たちを扱い快楽を満たす3人…
その姿に司祭も驚きを隠せない

司祭「長い間…レア様が望んでいた神祖様の復活…
この者たちがいれば…ようやく叶うかもしれません…。」

Episode 04

レア「あの子は…まだ見つからないのですか？」

ガルク＝マク修道院の私室の窓から
悲しげに外を眺めている大司教レア

彼女がそんな表情を浮かべる理由…それは

数か月前から行方不明となった…一部の士官学校生

そして ベレスのこと…

レア「なぜ見つからないの…
一体どこへ行ってしまったというの…？」

ベレスが消えたことに異常なほどの執着心と動揺をみせるレア
食欲も無いのか以前より痩せた印象が強く
目の下にはクマができています…
そこには普段の冷静で誇り高い大司教の姿はなかった

騎士団「全力で搜索しておりますが…
やはり修道院の外へ出た可能性は低いかと…。」

レア「…そうですね、必ず誰かの目に止まるでしょうし…
誰かがあの子を連れ去ったとは思えません…。」

数人の生徒と共に消えたベレス…
修道院の厳しい警備体制を考えれば誰にも見つからずに
抜け出すことは不可能に近い
そして何者かがベレス達を連れ去った可能性も考えにくい
生徒の中には有力貴族たちの娘などもおり
誘拐される理由が無いわけではないが

ベレスと共に士官学校で鍛えられた生徒たち…
何の騒ぎもなく連れ去られたとはやはり考えにくい

レア「まさか…みんな私にうそをついているのでは…？」

もはや何が真実なのか…すべてを疑い出しかねないレア

騎士団「…そ…それと…例の修道院裏で発見された横穴ですが…
ようやく元通りに修復されたようです。」

レア「そう…そんなこともあった…わ…ね……………!？」

ベレス失踪の報告を受け完全に忘れていたが…
地下へと続く謎の横穴の存在をようやく思い出した

レア「まさか…あの子 アビスに…いえ…でも
もしかしたら…そんなっ…!？」

動揺し膝から崩れ落ちてしまったレア…
慌てて駆け寄る騎士達だが…
レアは彼らに反応を示さない…

レアの頭の中には…過去に自分が行ってきた忌まわしき
実験の記憶がよみがえる…

かつて…「母親」を奪われたレアは
今でもその「復活」に執着しており
その復活のために様々な許されざる実験を繰り返してきた

過去に冷静さを失ったレアは
母の復活のために常軌を逸した数々の実験を行っていた…
それは…

自らの血を利用し様々な種族の特性を生かした
復活の可能性について…
その数々の実験の結果…

不幸にも誕生してしまった実験体…

それは現在アビスに最奥に潜む魔獣と呼ばれる存在たち…
レアに生み出された魔獣たちは本来持たない繁殖能力を持ち
交配し合い進化を続けてきた

レアはそんな魔獣たちの進化が「復活」のための知識となる
可能性を感じ…
地下深くへと魔獣たちを封印し、様子を見てきた…はずだった

常に冷静さを失わない美しき指導者の表情が…
一瞬で青ざめていった

ベレスがこの士官学校を訪れてから…
レアの頭の中は彼女のことではっきりと決まっていた
彼女こそが母親復活のための最大の鍵となる
可能性があるからだ
そんなレアの心境は教会の仕事にも大きく影響しており
様々な仕事でミスが目立ち始め…司祭たちを困らせていた

レア「は…はやくあの子を探しに行かないとっ!？」

騎士「レ…レア様どちらへっ!？」

暴走するレアを何人もの騎士たちが抑えようとするが
彼女を止めることができるはずもなく引きずられていく

もしもベレスがアビスへと向かったのであれば…
状況は最悪とも言える…

アビスには様々な事情で地上で暮らせなくなった人々が生きる町…
そして追われた犯罪者たちが築き上げた町まである…

そして自分が完全に放置してしまっていた実験体たち…
そういえばその管理を任せた司祭もいたはずだが…
名前も思い出せない…

レア「待っててベレス…いますぐ助けにいけますからっ!!!」

騎士たちを引きずりながら修道院の中を進むレア…
だがレアは想像もできなかった…
ベレス達がアビスで平穏に暮らしていることを…

そのころアビス最深部では…

数か月経った今でも…魔獣たちと共に生きるベレス達の姿があった

ベレス「あはっ…あああああっ!？」

魔獣の上に跨り自ら腰を振り喘いでいるベレス

豊満な乳房を大きく揺らすその姿は…

肌の色艶も良く、少しも痩せた様子はなく

むしろ以前にはなかった女としての魅力に溢れていた

感情を表に出さず笑うことも泣くこともなかったベレス

だが今は…

快樂に身を預け心からの笑みを浮かべる姿がある

その横には…



コンスタンツェ「あはっ…良いですわ、もっと…もっとっ!!」

魔獣化し狂暴化しつつある男たちの上で激しく腰を振る
コンスタンツェ…そしてハピ…

ハピ「ああ…中に出てる…これが…いいの…。」



以前よりも遥かに女としての魅力が増し
魅力的になった印象の二人…
大きくなった腹部を愛おしそうに撫でている

リシテア「ちょっと二人とも！
次は私たちの番だったはずでは…？」

男たちの上で悶えるコンスタンツェとハピに詰め寄るリシテア

コンスタンツェ「いいじゃありませんか…リシテアたちは
大分お疲れみたいですし。」

ハピ「無理はよくないよ…。」

昨日は一晩中、魔獣に体を捧げ続けたリシテア…
かなり疲れた様子でいつもより寝坊してしまった

リシテア「だからと言って順番は順番ですから…
さあ、変わってくださいっ！」

コンスタンツェ「もう…っ、
また魔獣たちと楽しめばいいじゃありませんか？」

リシテア「魔獣たちは今、師達が独占しています…。」

ハピ「じゃあ、当分終わらないね…。」

リシテア達が見つめる先には…
ベレス、エーデルガルト
ヒルダ、ドロテア、マリアンヌ、ベルナデッタ達の
姿があった…

国も血筋も…このアビスでは何の意味も持たない
全てから解放されたエーデルガルトたちは
このアビスを満喫している様子だった

アビスの魔獣たちをその体で手懐けてしまったベレス達
生贄が必要なくなったことにより
アビスにもある程度の平穏が訪れていた

犯罪者たちは教会への復讐など何かたくらんでいる
様子ではあるが
アビスの町やベレス達には一切手を出すことはなくなっていた

そしてそこにはもう一人…
士官学校の生徒ではない
アビス最深部で出会った人物の姿があった



ベレスとよく似た印象を持つ一人の見知らぬ女性
彼女はシトリーと名乗った…

彼女はかつて出産の際に子を助けるために不幸な結末を迎えたのだが
だが、彼女に恋を抱いていた男の手により遺体は持ち去られ
このアビスへと運び込まれていた…

レアの血を受け誕生した
アビスに満ちる魔獣たちの魔力の影響なのか…
彼女は一時的に息を吹き返した

しかし彼女は魔獣たちの魔力で蘇ったことに大いに困惑し
またこのアビスから離れれば再び死を迎えるという事実
絶望していた…

そんな彼女は当時のアビスの住民たちと交流することで
平穏な心を取り戻していったのだが…
魔獣たちがアビスの町を襲うという状況に遭遇した際…
自ら生贄として再びアビス最深部へと向かうことを決意した

そして現在…

生贄となったはずのシトリーはとても元気にしていた

魔獣たちに弄ばれることにもすぐに慣れ…
今では魔獣使いと呼ばれるほどにその扱いにも長け
魔獣たちをペットのように扱っている

そんなシトリーにもかつて愛した人との大切な思い出があり
時に過去を思い出し大いに悲しみに暮れる時がある
アビスの町を襲うほどに魔獣たちが暴れだしたのは
シトリーがアビス最奥に作られた自室へと引きこもってしまい
魔獣たちの相手をしなくなったことが原因であった
今ではそのシトリーの自室の隣にベルナデッタの引きこもり用の
部屋が築かれている

ベレス達よりも20歳近く年上のはずだが…
その外見はベレスたちと同年代にしか見えない

ベレスと共に喘ぎ大量の潮を噴き上げたシトリー

出会ってまだ数か月ほどだが
二人は異常なほどに仲がよくいつも共に過ごしている
年は変わらないように見えるが…まるで親子のように過ごし
生徒たちからも母親のように慕われていた…



レア「ここに…あの子がっ…！？」

ベレスがアビスにいる可能性にようやく気付き…
剣を片手にカトリーヌ達を率いてアビスへと向かうレア

カトリーヌ「アビスか…来るのは初めてだな…。」

シャミア「レア様…そんなに急がないでくださいっ！」

ベレスの安否しか興味のないレアは
ただアビスの最深部を目指して進んでいく

レア「まさか…これは…！？」

アビス最深部に集まった魔獣たちの群れ…

そしてその中心にいるベレス達の姿…
平然と魔獣たちと戯れているその姿に
困惑した表情を浮かべるレア…
カトリーヌ、シャミアたちだった…

司祭「おお、レア様！おひさしぶりです！
御覧ください！ 魔獣たちを手懐けたあの娘たちを！
魔獣化さえ跳ね除けるあの強力な力…
あの娘たちと交われば…さらに強力な力が誕生し
必ずや神祖様の復活のための大きな力になるでしょう！」

レア「……………」

興奮し駆け寄ってきた司祭の顔を見てただ茫然とするレア
ベレス達が無事だったことは幸いだが…
まさか自分が残した実験体と交わる結果になってしまうとは…

シャミア「レア様…。」

カトリーヌ「……………」

レア「う…ううっ…！？」

突然、涙を流し膝から崩れ落ちたレア…
名前を思い出せない司祭もその様子に驚いている

レア「ごめんなさいベレス…

私のせいであなたに辛い思いをさせていただきました…。

あなたの味わった屈辱…私もこの身で味わい…

この罪を償いましょう…！！」

シャミア「えっ！？」

カトリーヌ「レ…レア様あっ！？」

突如装備と服を脱ぎ捨て全裸となったレア…

そして魔獣と戯れるベレスたちの輪に加わっていく…

その完璧なスタイルと豊満な乳房…

恥じらうことなく涙を流しベレスへと駆け寄っていく

己の罪の重さに耐え切れなくなったレアは…

自分を罰するためにその身を犠牲にする決意をした

決して楽しそうなベレス達の仲間に加わりたかったわけではない

啞然としたままレアの姿を茫然と見つめるカトリーヌ、シャミア
そして名も忘れられた哀れな司祭…

カトリーヌとシャミア…

そんな2人も…やがてベレスたちの輪に加わることになる

ソテイス「なんじゃ…っ！？ わしが少し目を離している間に…
一体何が起きておるっ！？」

士官学校…そしてガルク＝マク修道院

セイロス聖教会

そしてフォドラの運命は…

この日を境に大きく変わっていくことになる

END

うあああっ!!
ダメ、やめてっ…そんな激しくっ!!

ズ
ズ
ッ

キ
キ
ッ

キ
キ
ッ



あああああっ!!
熱いものが…中に出てるっ…!!

ドク

ドク

ドク





やっ、やめなさいっ!!
うっ…私はアドラステア帝国
皇女…っ…あああッダメエツ!!

アゲ

アゲ

アゲ

あがつ...!?
ダメ...私...妊娠しちゃうっ
あああああつ!

いやあつ、そんな汚いものを…
わたくしの中に…あああつ!!
やめなさいっ…そんな激しく…!!

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ



あはあああつ!?
なんなの…この感じっ…
わたくしの中に…何か出てます…わっ…

ドクドク

ドクドク





ズンズンズン

ズンズン

ズンズン

ビュッ

いやあつ…!?
固いのが奥まで…!!
入ってきてるっ…!!

うあああああつ!!
体が…熱いよっ…
熱いのがたくさん出てるっ!

ヒッ

ヒッ

ヒッ

ヒッ

ピッ
カッ
アッ
アッ





あぐっ…!?!?
いやだ…こんなものっ…
ベルの中に…入ってきてますっ!?

あああああっ!?
お腹の中でビクビクして…
熱いのがたくさん…でてるっ…!?

ビクビク

ビクビク





クッ
クッ

きやああああっ!!?
ダメ、こんな太いもの入らないっ!!
うっ...いやっ、痛っ...!!

ズン
ズン
ズン

ズン

ズン



あああああつ...!?
お腹が...ダメ
おかしくなっちゃいまっ!?

ゴキウ

ゴキウ



あああつ、やめてっ…!!?
こんなこと…私のはじめてが…っ
いやあああつ…!!?

クッ

スズ

スズ



ああああっ!?
こんな…激しいのに…
ダメ…おかしくなりますっ!



きゃあああつ!!
な…なんなのよコレっ!!
ダメ…そんなところ…入らないで!

ブクブク

ブクブク

ブクブク

ブクブク

あつ…あががあつ!!
中で…動いてるっ!!
ダメ、イっちやううっ!!

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ

h



カカカ

いやああっ!!
だ…ダメっ!!
大きすぎるっ…奥まで届いてるっ!!

グ
グ
グ

グ
グ
グ



あつ…ひああああつ!!
やめて…もう耐え切れないっ!
またイっちやうよおっ!!



うっ…あああつ!?
なんで…体がこんな敏感につ…?
ダメだよ!そんな激しくしないでっ!

あはあああっ!!
気持ちいいっ!!
すごいたくさん中に出てるうっ!!

カ
カ

ゴ
ゴ

ゴ
ゴ

カ
カ
カ





うっ…ひぐっ…
なんでわたくしが…魔獣にっ…!!
あああ…入ってきましたわっ!
こんな太くて固いものが…
わたくしの中につっ!?



あああつ…
なんなの…この感じ…
なんでこんなに気持ちいいんですのっ!!
あああああああつ!!

うっあああああっ!?
そんないきなりっ、ダメっ!?
ああ：私の中ですごい動いてるっ!!

クハクハ

グググ

グググ

グググ



あはあああつ!!
私：たくさん産みつけられてる…
こ：こんな感覚はじめてっ…
もっとたくさん：私の中に入れてください!

ケケケケ

ヒュー

ドロ...

ひあああっ!?

師...!?

こんな太くて固いのものが...

私の中に根元まで入ってきてます!

ダメです...

気持ちよくてもう...イキそうです!?

ズ
ズ
ズ

ビ
ビ
ビ

ズ
ズ
ズ



ドク

ドク

ドク

ドク

あはあっ…!?
師見てくださいつ…!
私のアソコも…
お口の中も精液でいっぱいです…!



スッスッスッ

カッカッ

カッカッ
14

カッカッ
14

うっ!? あぐっ!?
すぐくっ…大きいよっ!
奥まで届いて…すごい…
気持ちいいっ!!

あがつ...あああつ!
あはつ...もうダメ...
そんなに入らないよおつ...!





あはっ…ああ…!!
今日もすごく大きくて
気持ちいいです…!!

あああっ!?
イクううっ...!?
もっと...もっと
私を気持ちよくさせてっ!

カッ

アッ

アッ

アッ

アッ



うふふ、いいですわよ…
さあ、今日もわたくしを気持ちよく
イかせてみせなさい…!!

クッ

バッ
バッ

バッ
バッ

クッ

あはあああああんっ!?!
いいですわ…すごい良い!
もっとなんに出して!
わたくしを孕ませなさいっ!!

ゴッ
アアア

ゴッ

ゴッ



カ
ン

あはっ!?
いいよ、すごくいいっ!
いっぱい中に出して…
気持ちよくイカせてっ!

ズ
チ
ズ

ズ
チ
ズ

h



アッ

うあっ…良い…!!
あああっ…すごい出てるっ!!
体が熱いよおっ…!!

アッ























































































































































































































































































































































































































































































































































































































































































































































































































































